

湾」という絶景に、思わず溜息が漏れた。

号線を熱海方面から走ってくると、市街地へと入っていく玄関口でもある このエリアには、下田聚楽ホテル、黒船ホテルなど下田を代表するホテルが 下田ベイクロシオは、下田湾を一望できる高台にある。車で国道135

クなデザイナーズホテルにイメージを刷新したのだそうだ。 ンな建物。なんでも1995年のリニューアルにともない、アーティスティッ ベイクロシオはその外観から異彩を放っていた。全壁コンクリートのモダ 並ぶ。

この日は、女ともだちとふたりでやってきた。

「ただただ海を眺めながら|日過ごさない?」

という私の誘いに、ちょうど仕事がひと段落して時間ができたという

彼女が、東京から来てくれたのだ。

東京や九州で、広報やブランディングの仕事に携わる彼女は〝超〞がつ

くほど多忙だ。「時間ができる」ことなどめったにない。「美しい海とゆっ

たりした時間で静養を取りなさい」という神様の声だろう。

チェックインを済ませると、客室係の男性が部屋まで案内してくれる。

エレベーター前まできて、コンクリートの壁に目が止まった。アワビやサザ

エ、ハマグリなどがまるでアートのようにコンクリートから浮き出ている。

「これ、貝殻ですよね?」

「そうなんです。ほとんどが目の前の海でとれたものなんですよ」

へえ! ふたりで感心していると、またまた客室までの廊下でアート作

品に出会った。

「この幾何学模様のようなものはなんですか?!」

ふたたび尋ねると、

「これも、建物をリニューアルしたときの建築士がデザインしたものです。

客室棟の廊下は海中をイメージしていると聞いています」

と丁寧に教えてくれる。

海中か……。いわれてみれば、照明を暗めに落としたコンクリートの壁

にデザインされた模様は、ミトコンドリアのようにも見えて、太古の海底を

思わせた(あとから知ったがそれは、アワビをモチーフにしたものだった)。



私たちは客室に入って三度驚いた。

標準タイプでも5平米と贅沢に設けられた室内は、 床は畳、 壁はコン

クリートという和とモダンの融合。さらに壁には月の満ち欠けがデザイン

されていて、斬新でいて安らげる空間になっている。

「こりゃあ、かなりこだわってつくられたホテルだね。 細部にまでデザイナ

ーの意思を感じる」とは友人。リゾートホテルのPRをしていたこともあ

る彼女が感心するのだから、間違いないだろう。

「わあ」

友人が感嘆の声をあげた。大きく採られた窓から望む下田湾の光景

に感動している。

向かって左側には須崎半島。柿崎から須崎へ至る海岸には、いくつもの

る。 。 ケハナ号」や大型船が碇を下ろしている下田港が港町の情緒を伝えてい 船が停泊している。正面から右に視線を向ければ、観光船の黒船「サス 静かな小湾には、赤い鳥居が目立つ毘沙子島がのんびりと浮かび、そ

の先には防波堤と犬走島。釣りをしている人がちらほら見える。

時が、ゆったりと流れている。

一海を眺めるだけの旅にふさわしい、贅沢な宿だね」

そうでしょう? 私はにんまりと頷いた。

ただ海を眺めるもよし。

柿崎エリアを散策するもよし。

ホテルのまわりには、まどが浜海遊公園、 吉田松陰が黒船に乗り込も

うと試みたことで知られる弁天島、ハリスの小径と、素敵なお散歩コース

がある。

「海を眺めながら部屋でのんびりしているよ」という友人を残し、私は外

を散策することにした。まどが浜からハリスの小径までは、海沿いに遊歩

道が整備されているから散歩にはもってこいだ。

走れる格好で出てきた私は、猫とカモメと船の浮かぶ漁港ならではの

景色を楽しみながら、ゆつくり走った。柿崎海岸は子どもの頃、ヨットスク

の音を聴いていたら、当時の子どもたちのはしゃぎ声がきこえてくるよう ールに通った懐かしの場所。いまはもうないけれど、浜に寄せる穏やかな波

だった。

ハリスの小径を走っていると太陽が傾いてきた。海面を西日が反射して

眩しい。停泊しているヨットは逆光でシルエットだけがいくつも連なっている。

素晴らしい時間。戻ったら友人に報告しよう。「ただただ海を眺めなが

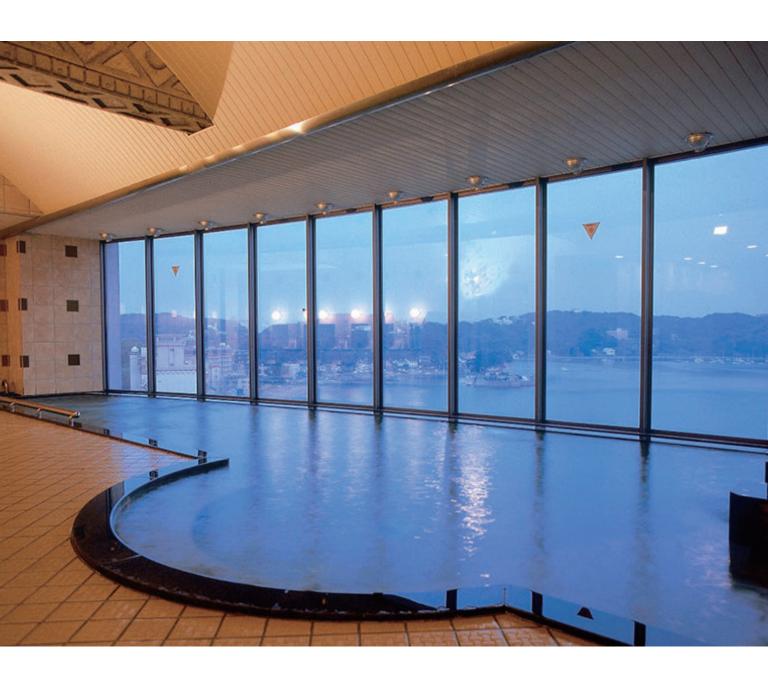
ら一日過ごさない?」

眼前の海で揚がった魚介を、

その海を眺めながら食す贅。

ンビューの展望風呂と露天風呂付きの庭園風呂と2タイプある。 1日ご るそう。寒い季節にはまた違った趣でこのホテルを楽しめそうだ。 女性は庭園風呂のほうだった。手入れの行き届いた日本庭園とハーブガ と男女入れ替え制なので翌朝入浴すれば両方とも楽しめる。1日目、 デンの緑が気持ちがいい。2月下旬頃には満開の紅寒桜が見頃を迎え 夕食の前に、楽しみにしていた温泉へ。こちらのホテル、大浴場はオーシャ

放的だ。夕陽で下田湾が青紫からピンクのグラデーションに染まっている。 午後六時、レストランを訪れた。海に面した側はすべてガラス張りで開



港の大型船には灯りがともり、ロマンティックな気分を盛り上げてくれる。

女ふたり旅だって、立派なデートなのだ!

シャンパンで乾杯、といけばおしゃれだが、ビール党の我々は伊豆の踊子ラ

ベルのサッポロ黒ラベルでグラスを合わせた。

料 理自慢の宿でもあるこちら。下田港揚がりの鮮魚が中心のメニュー

をコース仕立てでいただく。

だ前菜、旬の鰻をつかった煮こごり、そして本日のお造りは、ホウボウ、カン 地物のトマトを練り込んだトマト豆腐、目にも楽しい1品1品手の込ん

パチ、マグロ、甘エビの4点盛り。甘エビ以外、駿河湾と下田湾の魚たちだ。 分厚くカットされたカンパチのとろけるような舌触り、上品な白身の旨さ

が際立つホウボウ……。やっぱり下田は海の恵みがゆたかなのだ。そんな

話を友人としていると、サーモンピンクの制服に白髪がきれいなお給仕の ありそうなアワビの乗った卓上コンロを運んできてくれた。 女性が「アワビの踊り焼きです」と陶板焼の上に女性のげんこつぐらいは

だと思いますよ」。先ほどのお給仕さんが教えてくれる。蓋をあけると、 ふわっとバターの香り。皿の上でアワビが身をよじっている。たまらない光 ふたをして固形燃料に火をつけ、待つこと4、5分。「そろそろ食べ頃

まからも大変好評をいただいている当館自慢の一品です」 「料理長がサイズや厚みなど良質なものを厳選しておりまして、お客さ 景だ。

お給仕さんはさりげなく説明をしてくれながら、慣れた手つきでアワビ

を切り分けてくれた。





噛むと海のミルクと称されるあの旨みが舌を、鼻を、胃袋を刺激する。バ いちばんおいしいタイミングで火入れしたアワビは、むぎゅっとやわらかで

ターのコクがまた、いい。

「やっぱり、旅においしいものは不可欠だよね」

海を眺めるだけの旅などとクールに決めるつもりだった私たちは、

前の海でとれた魚介を、すでにミッドナイトブルーに装いを変えたその海

を眺めながら食べる愉楽に酔いしれていた。

「続いて、下田といえば金目鯛。下田港揚がりの煮付けでございます」

キンメの煮付け。その味は……。もう語らずとも十分でしょう。いまが旬 本日の真打ちの登場ですとばかりに、運ばれてきたのはつやつやに光る

だというキンメはふつくらとやわらかで、金目鯛でしか味わえない脂の甘

さを堪能させていただいた。

うだったねえ」と満たされた。その「ごちそう」は、たしかな食材であるこ もてなすひとたちの「心」も含めての満足感だ。料理は、その食材の命 とはもちろん、お客に喜んでいただきたい、楽しんでいただきたい、という とともに、携わるひとたちの気持ちもいただいているのだから。 地元の貴重な食材をふんだんに取り入れた食事に、私たちは「ごちそ

ラ笑ってすっきり、という他愛のない話も。真剣で熱い語りも、軽い冗談 も、どんなときも窓の向こうの海は、変わらずにそこに在った。 いろな話をした。お互いの人生観にふれる本質的なこともあれば、ゲラゲ その夜、わたしたちは闇に沈む海を眺めながら、ずいぶん遅くまでいろ

翌朝。 東京での仕事があるからと、友人は始発列車で発った。

ひとり残ったわたしは、見晴らしのいいレストランでゆっくりと和食の朝

食をいただいた。

「おはようございます。あらお連れの方は?」

昨夜と同じ女性に声をかけられ、事情を説明すると、

「働く女性は素敵ですね。しっかりリフレッシュできたならいいのですが」

とにこやかに微笑む。

ご安心ください。わたしたちは下田湾の青とみなさんのおかげで充電

はフルチャージ。ふたりとも、今日からまた頑張れます。

そんな気持ちを胸に、ホテルを後にした。

